

鹿大ジャーナル

KADAI JOURNAL

鹿大広報

<https://www.kagoshima-u.ac.jp/>

特集

「南九州から世界に
羽ばたくグローバル教育研究拠点
鹿児島大学」を目指して



鹿大ジャーナル movie
One Minute

NO. 211
2019 SUMMER

鹿児島大学第13代学長

佐野輝学長就任

「南九州から世界に羽ばたくグローバル教育研究拠点・鹿児島大学」を目指して

平成31年4月に、鹿児島大学第13代学長に就任した佐野輝学長に大学運営にあたっての抱負を聞いた。

学長就任にあたって

鹿児島大学長に就任した佐野輝です。学長就任にあたり、改めてその重責に身の引き締まる思いです。もとより様々な事業の推進や改革など皆さまの協力的なしには成し得ず、重ねて皆さまのご協力をお願いします。

鹿児島大学は、9つの学部と9つの大学院研究科を擁し、約9000名の学部学生と約1600名の大学院生（うち留学生約300名）が在籍しています。これまでに10万名を超える卒業生を輩出し、国内はもとより世界の各地で、人類の平和と繁栄ならびに福祉の向上のために大きな足跡を残してきました。

鹿児島大学の起源は、1773年に設立された藩学造士館にさかのぼりますが、明治以降に設立された第七高等学校造士館をはじめ各種の高等専門学校を統合し、昭和24年に新制国立鹿児島大学



として発足し、今年で70周年の節目を迎えます。

さて、私は、2019年度からの4年間の学長としての任期におきまして、「教育」、「研究」、「社会貢献」、「診療」、「管理運営」における以下の5つの基本目標に取り組みたいと考えています。

「教育」に関しては、グローバルな視点を有する地域人材、すなわちグローバル人材の養成に向けた教育改革に取り組みます。国際バカロレア入試や外部英語入試を活用し、学部・大学院教育における英語教育の充実を図り、教育の国際標準化に努めます。稲盛和夫基金により設立された鹿児島大学21世紀版薩摩藩英国留学生派遣事業「UCL稲盛留学生」制度の運営の充実を図り、文部科学省「大学の世界展開力強化事業」での「米国から鹿児島、そしてアジアへ——多極化時代の三極連携プログラム」の運営を開始します。

「研究」に関しては、大学の強みと特色を生かした学術研究の推進を行います。稲盛和夫基金、鹿大「進取の精神」支援基金をはじめとした基金の活用で、若手や競争的資金の獲得が難しい基礎研究や人文社会学分野などへも支援体制を作り、地域特有の課題研究を推進するとともに、先進的で卓越した研究をも促進します。

「社会貢献」に関しては、南九州・南西諸島を中心とした地域が抱える課題に対処するよう考えます。地域ニーズに応じた社会人教育や地域との定期的協議を行うなど連携の強化を行い、産官学の連携を密にすることを図ります。



「診療」に関しましては、附属病院を有する大学の機能として、先端的基礎的研究から橋渡し研究の結果としての先進的医療を実践し、地域性を生かした質の高い医療を行うとともに次世代の教育に努めます。

「管理運営」に関しましては、学長戦略室を含むIR体制や監査機能を充実させて、自らをよく知り、評価結果を改革に生かします。

このような活動を通して、大学の再生を図り、その存在が国民に明確に認識され、地域社会ならびに国際社会に貢献し、本学の全構成員、卒業生、地域が誇りとする鹿児島大学を目指しています。

逆境さえも自らの糧に!!

遡ることおよそ150年前、日本は、明治維新

老僧隠言の一句

生死未断
不可妄陳

これは、私の父も座右の銘としていた「人間の価値は棺を覆ったのちに定まるで、生死未だ断じないで妄陳してはいけない」という老僧隠元の一句で、苦しいと思う時にも、高らかにおおらかに善意を失わず、常に前向きに、人を包めるようにと肝に銘じています。

という大変革の時代でした。ここ鹿児島は、そうした我が国の変革と近代化を推進した西郷隆盛や大久保利通など、数多くの人材を輩出してきた地です。

さて、現在に目を向けますと、平成から令和への改元、そして、少子高齢化やSociety5.0をはじめとした超情報化社会の到来など、対策に待ったなしの大変革の時代を迎えています。国立大学においても、時代の潮流に揉まれながらも、次の数



十年先を見据えた改革・運営を迫られています。

本学の大学憲章では、「自主自律と進取の精神を培い、自ら困難に立ち向かい、地域社会や国際社会で活躍しうる人材を育成する」と謳っています。

私の敬愛する本学第7代学長を務められた井形昭弘先生は、四半世紀もの前にまとめられた著書

佐野学長 略歴

| | |
|----------|---------------------------------|
| 昭和56年 3月 | 神戸大学医学部医学科卒業 |
| 昭和60年 3月 | 愛媛大学大学院医学研究科博士課程修了（医学博士号取得） |
| 昭和60年 4月 | 愛媛大学医学部助手 |
| 昭和61年 8月 | 米国ミシガン大学精神衛生研究所で研究に従事 |
| 昭和63年 8月 | 愛媛大学医学部助手 |
| 平成 4年 1月 | 愛媛大学医学部附属病院講師 |
| 平成 5年11月 | 新居浜精神衛生研究所附属新居浜精神病院医師 |
| 平成 6年 6月 | 愛媛大学医学部附属病院講師 |
| 平成 8年 9月 | 愛媛大学医学部助教授 |
| 平成14年 9月 | 鹿児島大学医学部教授 |
| 平成15年 4月 | 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科教授 |
| 平成25年 4月 | 鹿児島大学医学部長（～平成29年3月） |
| 平成25年 4月 | 国立大学法人鹿児島大学教育研究評議会評議員（～平成31年3月） |
| 平成29年 4月 | 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科長（～平成31年3月） |
| 平成31年 4月 | 国立大学法人鹿児島大学学長（～現在） |

の中で、その当時既に、「地域の特性をいかし、鹿児島のことに関してはどこにも負けない分野を持った魅力ある大学でなければならぬ。」と今日の鹿児島大学の目指す方向性を示されておりました。

そのための方策として、鹿児島に愛着を持った教授陣の集約、産学協働の勧め、生涯教育の推進を説かれ、さらに、「大学の内なる国際化」を進め、国際的発信を行う真のグローバル化が必要と述べられています。そのような井形先生の思いが、学長所信表明で述べた「南九州から世界に羽ばたくグローバル教育研究拠点・鹿児島大学」の原点なのです。

鹿児島では祝いの事の際の雨を「島津雨しまづのあめ」と言い、

吉兆のしるしとされています。催事のような大事な場面での雨天は、一般的には嫌われそうなものですが、そうした障害さえも、ポジティブに捉えて進んでいこうという独自の文化を感じます。

はじめに、明治維新のことについて少し触れました。現在では、現存する史料等により、その当時の状況を想像・推察することしかできません。先人達は、想像を絶する逆境を乗り越え、今の世の中を形成してきたことでしょう。過去は、変えることはできませんが、未来は、いくらでも創造することができます。今後、幾多の困難が待ち受けているように、進取の精神の下、逆境を乗り越えるのではなく、逆境さえも自らの糧にして、地域と共に成長し続ける大学を目指していきます。

佐野学長ってどんなヒト？

趣味は魚釣り!!
見てください、この釣果を!!



専門は精神神経科学
精神科医出身の学長は珍しいとのこと。

鹿児島大学桜ヶ丘祭で
MVT (Most Valuable Teacher) 賞を
4年連続受賞(H17-20)!!

教育の現場では、学生からも慕われていました。

歴史・地理好き!!
鹿児島の歴史・地理に明るい!



世界遺産・百舌鳥古墳群 (大阪府堺市)



高句麗将軍塚古墳
(中国吉林省集安市)



神領10号墳出土埴輪
(鹿児島県曾於郡大崎町)

「古代東アジアの王陵」

(共通教育科目)

総合研究博物館

教授

橋本達也

先生



古墳を通じて 国家の成り立ちを 考える

古墳を手がかりとして、考古学的手法によつて古代日本を含む東アジアの歴史を学ぶ授業が「古代東アジアの王陵」。考古学者・橋本達也先生の解説のもと、東アジア各地域の史跡や資料などのスライド映像を見ながら歴史をひもとく講座だ。東アジアという広い視野の中で、日本列島の古墳の盛衰と国家の成り立ちをとらえるほか、近・現代における王陵の位置づけについて考察するなど、多面的な歴史の見方について理解を深めることも授業のねらいとなっている。本学の公開授業の一つとしても例年人気の高い考古学教室を覗いた。

古墳は物語る

全長約500mを超える巨大な前方後円墳・大仙陵古墳（仁徳陵古墳）をはじめ、大小さまざまな古墳が密集する大阪の百舌鳥・古市古墳群が今夏

世界遺産に登録され、大きな話題になった。日本列島には西暦3世紀からおよそ400年間、権力者の墓として巨大な前方後円墳を造る社会が存続した歴史がある。大きな墓は単なる埋葬の場ではない、と橋本先生は語る。「巨大なモニュメント造りに労働力を集約する、あるいはモニュメントを共有することによって社会的「体感」を作り出す。人心を支配する装置として古墳は存在していました」

7世紀の半ば、中央政権によつて地域が支配されるようになると各地の古墳造りは停止。大和・飛鳥地方で政治の中枢にいた有力者の墳墓造営を最後に、国内の大規模墳墓造りは終焉を迎える。「中国で生まれた律令体制にならい、日本でも法律や制度によつて地域を支配する段階へと移行しました」。仏教の思想が導入され、火葬の風習が取り入れられたことも古墳の衰退につながった二因という。「律令制や仏教など、新しい思想や文化が大和や半島から日本列島にもたらされたのは、それ以前の時代から相互の深い関係があったからこそ」。中国の文書に残る記録のほか、日本の古墳に表れる外来文化の要素、同時代の朝鮮半島諸地域の古墳との比較を通して東アジア各地域の密接な交流の足跡を読み解くことができる、と橋本先生は

話す。「軋轢が生じることもありすが、近隣の国としてつねにお互い影響し合う。不即不離の関係と言えます」

王陵の変遷

古墳が造られなくなった日本列島において、その後、権力者の墓造りはどのように変遷したのか。講座の後半では、古墳時代以降の墓の歴史について話が進められた。「奈良時代になると、地位の高い人々は仏式の火葬を選び、墓は骨壺を小さな穴に入れる程度のものへと変わりました」。鎌倉・室町時代の名だたる将軍や武将の墓も所在不明のものが多く、歴代天皇の陵墓も中世にはきちんと継承されていた形跡がないのだという。ところが、江戸時代に入ると、日光東照宮に代表されるように、権力者の霊を祀る場が政治的に利用されるようになる。「埋葬される人物が神聖な存在であることを証明し、過去に遡つて正当な存在であることを示す必要があるとき、モニュメントとしての墓が現れています」。幕末期から明治期になると、尊王攘夷、勤皇思想の高まりとともに、中世には継承されていなかったはずの天皇陵の探索・治定と整備が進んだという。「現在、天皇陵と言われている古墳は、日本近

代化の遺産とも言えます」

歴史を学ぶきっかけ

受講していた小倉菜穂子さん（教育学部1年生）は「教科書に出てくることを覚えるのが歴史の勉強だと思つていましたが、いろいろ考えさせられる奥の深い分野です」と感想を話す。社会人受講生の川崎達雄さんも「歴史にはさまざまな見方があることに気づかされています。真理を探究していきたい」と語る。数多くの調査研究に携わつてきた橋本先生は「考古学は、住居跡や土器などモノ（物質）資料の分析を通じて文書に書かれていない過去を復原し、人類の歴史を学ぶ学問。新しい資料が発見されて通説が大きく変わることも頻繁にある。多面的なものの考え方を学んでほしいです」数多くの調査研究に携わつてきた橋本先生のメッセージだ。



橋本 達也（はしもと・たつや）教授

鹿児島大学 総合研究博物館

【学位】修士（文学）早稲田大学

【所属学会】日本考古学協会、考古学研究会、日本考古学会、日本文化財科学会

【専門分野】考古学（古墳時代）、文化財科学・博物館学

【研究テーマ】古代日本列島の国家形成過程における地域間交流と社会変革に関する研究、考古学による古代東アジアの交流

BOBOG INTERVIEW

先輩からのメッセージ

ボーダーを越え新しい領域にチャレンジした時に
結果はどうあれ自分の進むべき道が見えてくる。

クリエイティブディレクター／UXディレクター 伊原 亮(いはらりょう)

鹿児島県出身。2003年3月鹿児島大学法文学部法政策学科卒業。福岡県で靴メーカー勤務の傍ら映像制作を学び映像制作会社へ転職。2017年1月、太陽企画株式会社入社。
出品・受賞歴：2017年7月コンテンツ東京（日本）及び2018年3月SXSW（米国オースティン）において自ら制作した HoloLensコンテンツ「HOLOBUILDER」出展、高い評価を得る。2018年ACC TOKYO CREATIVITY AWARDS(日本最大級広告賞)クリエイティブイノベーション部門においてグランプリ/総務大臣賞受賞



特

殊なパルーンで宇宙を撮影するコンテスト運営のサポート、マイクロソフトから発売されたMR^{※1}デバイス「HoloLens」アプリの企画開発、

東京大学築谷研究室と大日本印刷が共同開発する薄型で伸縮性のあるディスプレイ「スキエンレクトロニクス」のPR、伊原さんの仕事は多岐に渡る。法文学部法政策科を卒業後、福岡県の靴メーカーに就職。営業として勤務し、自分の担当店舗に宣伝用ポップを作るため、休日に映像、デザイン、CGの専門学校に通いその魅力にのめり込む。卒業制作を機に転職を決意。福岡の映像制作会社に10年勤めた後、2016年末に上京。TVCMを中心とした総合映像制作会社、太陽企画に入社した。上京後、数多の映像クリエイターが活躍する業界を目の当たりにして危機感を覚えた。「東京で頭一つ抜けるには自分だけの武器が必要」と、自らの領域を広げるためプログラミングの勉強をスタート。人の動きに反応してリアルタイムで表現が変わるサイネージやAR、VRコンテンツの企画・開発

を開始した^{※2,3}。折よく、社内に新部署「TAIYOKIKAKU R&D」が開設。映像とテクノロジーを結びつけた自主コンテンツ開発や新規ビジネス創出に携わり、企業や大学との協業を担当している。2018年に前述の「スキエンレクトロニクス」のPRを担当。制作した映像は同年、日本最大級の広告賞であるACC TOKYO CREATIVITY AWARDSクリエイティブイノベーション部門で最優秀賞であるグランプリ/総務大臣賞受賞という栄冠に輝いた。才能あふれる伊原さん。一体どんな学生時代を送ったのだろう。聞くと「テニスサークル活動に没頭していました。練習と遊び、どちらもがむしろに熱中して打ち込んでいた。いまの自分の基礎を作ってくれた。」と語る。それぞれの分野で活躍する先輩や仲間の姿は、いまでも刺激になっている。鹿児島へのメッセージを尋ねると「活動する業界での自分の立ち位置を知ること」の言葉。その思いが湧いたのは昨年、ラスベガスでテクノロジー・家電の世界最大展示会CESを視察した時だという。

「中国、韓国、日本の大企業は会場の端にひっそりブースを出していた。外の世界を知る事で初めて自分がいかに小さな世界で活動しているかが分かった。」世界における日本の立ち位置、日本における鹿児島県の立ち位置を改めて考え直すきっかけになったという。今後の目標を尋ねると「野村総合研究所調べによると鹿児島は成長可能性都市ランキングで福岡に次いで2位。歴史、観光、畜産業、ポテンシャルはあるが活かしきれていない。1つの要因にはクリエイターが少なくPR、アウトプットに繋がっていない。東京に出てきて感じるのはデジタル・テクノロジーの展示会やクリエイターの育成、クリエイティブに関する事業などに触れられる機会が鹿児島は圧倒的に少なく感じる。そういう地方と都市の格差を自分が培ってきた経験や繋がりで橋渡しをし、若い人たちに興味をもってもらい職業として目指せるようなタッチポイントを増やしたい。」と語る。東京で活躍する先輩の思いは、いつも故郷へ注がれている。

※1 MR: Mixed Reality (複合現実)。現実世界をリアルタイムに認識する事ができ、CGなどで作るデジタル情報を現実世界に作用させる技術。

※2 AR: Augmented Reality (拡張現実)。現実世界にCGなどで作るデジタル情報を加え、仮想現実を反映(拡張)させる技術。

※3 VR: Virtual Reality (仮想現実)。ディスプレイに映し出された仮想世界の中に自分がいるような臨場感を体験させる技術。



1 特殊なパルーンで宇宙を撮影するコンテストの運営サポートと動画の審査員も務めている。 2 映画・音楽・インタラクティブの大規模展示会SXSW(米国オースティン)出展の様子。 3 「スキエンレクトロニクス」PR動画のラストカット。「いいね」マークがストーリーを印象付ける。 4 マイクロソフト社のMRデバイスHoloLensを使ったアプリHOLOBUILDERを独自開発、リリースした。 5 「スキエンレクトロニクス」のPR映像でACC TOKYO CREATIVITY AWARDSクリエイティブイノベーション部門においてグランプリ/総務大臣賞受賞。 6 鹿児島県産業創出課が運営するクリエイティブ産業創出拠点施設「markMEIZAN」のPR等を積極的にサポート



Scholar Interview

研究室から

★
寺
田
竜
太
先
生鹿兒島大学
大学院連合農学研究科 博士(水産学)

目の前にあるのに知らないことの多い海の中、
見えない環境にも関心を向けてほしい。

★
寺
田
竜
太
先
生
田竜太先生は主に熱帯・亜熱帯域における

海産植物の第一人者として、広く国内外で研究・教育活動に従事。近年では研究成果をもとに、沿岸域の保全活動への協力や地域への情報発信など、社会貢献活動にも積極的に取り組んでいる。平成24年度、子どもたちを対象にスタートした環境教育講座「発見！体感！本物の海藻を見てさわって食べて『海の森図鑑』をつくろう」は独立行政法人日本学術振興会「ひらめき☆ときめきサイエンス事業」に8年連続で採択され、今年も夏期講座が開かれた。

★本物の海藻を使って
世界で唯一の
海藻図鑑を作る

夏休みに開かれた講座には、県内の小学生と保護者30組が参加。寺田先生や学生が採取した本物の海藻および30種を材料に使い、光をあびて光合成をする様子を観察した。さらに、押し葉を作ってラベルを貼り学術標本を作

成。寺田先生手作りの詳細なテキストも配布され、「大で学ぶレベルと遜色のない」講義が行われた。日頃口しているノリ、ワカメ、コンブなどの生の姿に触れ、またテングサから寒天ゼリーを作って食べる体験もあり、講義には「食育」の要素も盛り込まれている。子どもばかりではなく、むしろ保護者が熱中する姿が印象的だ。「陸上であれば、例えば山火事が起こると人々は大騒ぎしますが、海の中で植物がなくなっても気づく人はほとんどいません。見えない環境にも関心を持ってもらおう、というのがこの公開講座のねらいでもあります」と、寺田先生は話す。

★見えない世界にも大切なものがある

海の植物には海藻（藻類）と海藻（海産顕花植物）の二種類があり、それら植物の群落である「藻場」は、陸上の森と同じように「海の森」を形成している。海藻や海草は陸上植物と同じく光合成生物であり、沿岸域における主要な基礎生産者だ。さまざまな種類の生き物の生息場、あるいは産卵場としての役割も担っており、同時に藻場そのものが人による漁獲の対象となっている。

陸上の森と同じく掛け替えのない「海の森」だが、環境省の絶滅危惧種検討委員も務める寺田先生は海の砂漠化（磯焼け）が進んでいる現状

を指摘

する。「ノリ

の代名詞になっ

ているアサクサノリ

も、いまや絶滅危惧種の

一つ。現在、選抜育種された

種が養殖されており、原種が

自生しているのは全国で40カ

所くらいになってしまったとい

う。水産庁の試算によると、

全国の藻場すなわち「海の森」

は、この40年間に30%ほどが

消失。県内でもこの10年間で

消えてしまったアントクメやア

マモの藻場が確認されていると

いう。「高度経済成長期は埋

め立てや汚水による水質悪化

という要因がありました。が、

最近では温暖化の影響によると

ころが大き。海藻自体が亜

熱帯性なものへ変化すること

もあり、九州沿岸では藻場が

消えて

サンゴが

増えてい

ます」。

各地の

漁業者

や沿岸

域の住



海中で光合成を測定している様子

民による藻場の保全や再生の取り組みに対し、調査やモニタリングなどを通じて助言を行い、海外でもベトナムやタイ、インドネシアなどの国々において養殖や開発のアドバイスを積極的に行っている。

★自然の姿から垣間見える人の暮らしぶり

海に限らず、川や湧水など淡水に生える藻類の研究にも携わる寺田先生は、淡水の藻類にも変化が現れていると話す。「昔、集落にはきれいな水が湧くところがあって、生活に欠かせない場所でした。ところが、公共水道が普及して多くの水場が忘れられてしまった。生活は豊かになりましたが、伝統的な生活の中で大事にしていた空間が荒廃して、そこにしか生えない種が消えてしまったという現実もあります」。研究者としてできることは社会への情報発信、と幾度となく口にするのは、植物の声なき声を拾ってきた科学者の使命感からなのかもしれない。



海藻サラダの原料トサカノリ



(左) 寺田先生の撮影・執筆・編集によるタイの海産植物図鑑 (右) 夏休みの立派すぎる自由研究成果ともなる「海の森図鑑」

Profile

寺田 竜太(てらだ・りゅうた)

北海道大学 水産学研究所 水産増殖学専攻 博士課程1999年03月修了
 [学位] 博士(水産学), 北海道大学, 1999年03月
 ■所属学会: 日本藻類学会、日本水産学会、International Phycological Society (国際藻類学会)、Phycological Society of America (米国藻類学会)、日本応用藻類学会
 ■専門分野: 水圏植物学、海洋生態学、水産植物学、藻類学
 ■研究テーマ: ○熱帯至熱帯域における海産植物の分類学、生理生態学、増殖技術開発など

生活者の「生きる力」の育成と家庭科教育

教育学部
黒光 貴峰 准教授

1. appeal point

家庭科教育における「住」の領域において、ITCや模型を活用した汎用性の高い教材やカリキュラムを開発しています。小・中・高等学校をはじめ、教育機関との共同研究を希望しています。

2. appeal point

生活に関する諸問題の解決に向け、地域と連携した共同研究を希望しています。



【家庭科教育を通して衣食住への本質的な興味・関心を育む】 研究の背景

家庭科教育学とは、家庭生活を中心とする人間の生活に関する学問です。近年、地域社会、家庭生活が多様化し、さまざまな課題が生じてきています。一つには、生活者の衣食住への関心が薄くなっているということがあります。例えば、現在では、質の高い衣服が安価で手に入り、1年中食べたいものが食べられます。室内はスッチーフで快適な室内環境を整えることができ、便利、快適が暮らしの中の「当たり前」になっています。しかし、その当たり前が災害などによって失われることもあります。日ごろから衣食住への意識や関心を高め、自分たちが主体となって課題を理解し、解決していくことが必要です。生活への意識を高めるため、学校教育を中心に、とくに家庭科教育の視点から人間の生活の資質向上をはかることを目的として研究を進めています。

【家庭科教育に貢献する実践的教材やカリキュラムを開発】 取組の特徴

学校、家庭、地域と連携することにより、教育現場のニーズに合わせた教材やカリキュラムを開発しています。近年では、学習させる対象が教材として教室に持ち込むことが難しく学習者にイメージしにくい「住まい」、「地域」の領域において、教材を開発。具体例としては、ITCを活用した「住み方演習用の教材」や伝統的な建造物を題材とした「ペーパークラフト教材」、日本の伝統的な遊びを取り入れた「かるた教材」など、住まいについての総合的な教材を開発しています。総合大学の強みを生かし、学内他学部・学科との連携による研究も行っています。

また、地域はさまざまな教育資源が埋もれています。それらを掘り起こし、教育に生かすことにより、学校教育の充実だけでなく、地域の諸問題の解決、活性化への貢献をはかっています。

取り組み事例



鹿児島市防災ノートの作成

鹿児島市防災教育推進委員会を中心となって作成した教材です。防災に必要な知識、能力を発達段階に応じて系統的に学習できるよう小学1・2年生用、小学3～6年生用、中学生・高校生用の3種類を作成。児童、生徒が考えたことや調べたことを書き込めるノート型とし、緊急時には携帯し活用できるものを目指しました。防災や自然災害に対する興味・関心のきっかけづくりというねらいもあります。



水防災河川学習プログラムの作成

鹿児島県北部豪雨災害（平成18年）における課題や東日本大震災時の経験を踏まえ、学校教育における水防災教育を充実させるため、行政（国土交通省川内川河川事務所、さつま町）、教育現場（さつま町立盈進小学校）、教育・研究機関（鹿児島大学）が連携し、学校教育の中で体系的に防災教育を行うことのできる防災学習プログラムの開発を行いました。



模型教材の作成

安心、安全、快適な住環境をシミュレーションする教材として、本学理工学研究科の増留・柴田研究室の協力を得て縮尺10分の1の模型教材を作成。玄関、リビング、キッチン、和室、寝室、子供部屋のそれぞれの住まい方を考えられるとともに、6室合わせた間取りの検討も行えるようになってきました。今後は、家庭科の教員の苦手意識が高い住居領域に対し、有効な教材となるよう改良を重ね、全国の教育現場に提供したいという思いがあります。

Profile

2000年3月 京都教育大学教育学部家政学専攻卒業
 2002年3月 京都教育大学大学院教育学研究科教育専攻 修士課程修了
 2005年3月 京都府立大学大学院人間環境科学研究所博士後期課程生活環境科学専攻 単位取得後退学
 2007年3月 博士(学術)の学位取得(京都府立大学)

いでしょうか。
 戦後、日本では「豊かさ」の象徴として「明るさ」を追い求めてきました。室内には蛍光灯、街には、深夜でも煌煌と光る24時間営業の店の明かり。それらは私たちに、ある種の安心感、そして、便利さを与えてくれましたが、それとともに「闇」という存在を消し去ってしまいました。かつて「日本の夜は明るすぎる」と嘆いた谷崎は、単に光の明るさを嘆いたのではなく、私たちの生活から、光と闇がおりなす陰翳の濃淡、すなわち、日本の住文化が消えていってしまったこと。言い換えると、「闇」とともに「私たちが普段の生活において、意識していたこと、また、関心していたこと」そのものが無くなってしまったことを嘆いたのではないのでしょうか。私たちの生活は、便利になり、快適になり、豊かになりました。しかし、本当の意味で「生活が豊か」になったのかということとは、もう一度、問い直してみる必要があるのではないのでしょうか。



鹿大メッセージ

ほんとうの豊かさを問い直してみよう。

教育学部 黒光 貴峰(くろみつ たかみ) 准教授

私が、いつも持ち歩いているものに、谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」という本があります。昭和初期に書かれた随筆で、この書の中で、谷崎は「暗がりの中に、ぼんやりと見えそうで見えないかげり、うつろい、それこそが日本の住まい、日本の美である」として礼讃しています。人間は本来、闇を畏れる生き物で、それは動物としての本能です。そのため、西洋の住まいの考え方は、可能な限り部屋を明るくし、かげ、陰翳を消す事に執着しましたが、日本の住まいでは、むしろその「かげ」を利用し、陰翳の中でこそ、生える美を作り出したと述べています。そして、谷崎は「日本の夜は明るすぎる」と嘆いています。



・南九州市と包括連携協定を締結

鹿児島大学と南九州市は、3月13日、包括連携協定を締結しました。本協定は、それぞれの有する資源や機能等の活用を図りながら、幅広い分野で相互に協力し、地域社会の発展と人材の育成に寄与することを目的としたもので、鹿児島大学が「地域活性化の中核的拠点」を目指して地域との連携を強化する取り組みの一環です。

南九州市役所知覧庁舎において執り行われた調印式では、前田 芳實学長と塗木 弘幸南九州市長による協定書への署名に続いて、塗木市長が「南九州市の強みである農業や観光など幅

広い分野において連携協力し、第2次総合計画に

掲げる目標達成に向けたまちづくりを進めていきたい」と挨拶。続いて前田学長から、「今回の協定締結を機に、お茶をはじめとする農畜産物や観光資源など、豊かな食や伝統工芸、自然に恵まれた歴史ある南九州市との連携協働を強化し、『地域活性化の中核的拠点』を目指す大学として積極的に地域社会の発展に貢献したい」と抱負が述べられました。

鹿児島大学が県内自治体と連携協定を締結するのは、本協定で10例目となります。今後は、主に農作物、獣害対策、畜産、園芸、水産業などの分野で、産学・地域共創センターを中心とした活動を進めていく予定です。



・熊本大学と合同設置する

「ヒトレトロウイルス学共同研究センター」に関する協定を締結

鹿児島大学と熊本大学は、3月18日、熊本大学において、4月に両大学が合同設置した「ヒトレトロウイルス学共同研究センター」の編成及び運営に関する協定を締結しました。

この「ヒトレトロウイルス学共同研究センター」は、鹿児島大学難治ウイルス病態制御研究センターと熊本大学エイズ学研究センターを統合・再編。それぞれが有する資源を有効に活用することによって、世界的課題である「難治性ウイルス（HIV-1、HTLV-1、HBV 及びその他の関連する難治性ウイルス）感染症」について、感染予防と治療を目指した世界的・全国的な研究及び教育の総合的推進を図るために新たに設置したものです。

同センターは、単なる大学間の連携・協力による運営ではなく、両大学が一体となって運営する研究組織を設置するもので、各大学の抱える人的・財的問題を解消し、新たな研究拠点を構築・活性化するための画期的な取り組みです。

同センターの合同設置により、新たなワクチンや治療薬の開発、若手研究者の育成、海外研究機関との連携強化など、難治性ウイルス感染症の撲滅を目指した研究及び教育が活発化することが期待されます。

協定書締結式では、前田 芳實鹿児島大学学長と原田 信志熊本大学学長が協定書に署名し、新センターの編成や運営に関する重要事項について確認しました。

学法人熊本大学と国立大学法人鹿児島大学「ヒトレトロウイルス学共同研究センター」に関する



・教育学部の池川 直教授が

平成30年度(第75回)日本芸術院賞を受賞

3月22日、鹿児島大学教育学部の池川直教授が制作した彫塑「時の旅人」（平成30年度改組新第5回日展出品作）が日本芸術院賞を受賞しました。

日本芸術院賞は、卓越した芸術作品と認められるものを制作した者及び芸術の進歩に貢献する顕著な業績があると認められる者に授与されるもので、6月、東京上野の日本芸術院会館において挙行された授賞式には、天皇皇后が幸啓されました。

受賞作の「時の旅人」は、人物2人と犬を組み合わせた195cmの繊維強化プラスチック製の群像で、古代からのメッセージに気付かなければならないという思いを込めたとのこと。また、寄り添う犬には、数年前に亡くした愛犬の姿を重ねたそうです。



受賞作「時の旅人」

・共同獣医学部が獣医学教育評価において「基準に適合している」と認定されました

共同獣医学部は、4月1日、公益財団法人大学基準協会の「獣医学教育評価」において「基準に適合している」と認定されました。

この評価は、大学基準協会が、獣医学教育学士課程の水準の向上をはかるとともに、評価を通じて、獣医学教育学士課程の質を社会に対して広く保証することを目的として判定するもので、全国獣医系国立大学10校（うち8校は、2校ずつ連携して共同獣医学過程を運営）の中で最初の認定取得となりました。本評価において「基準に適合している」と判定されることは、獣医学教育はもとより、組織の取り組み、運営体制などが評価されたこととなります。

共同獣医学部は、平成24年に本学9番目の学部として設置されて以来、豊かな人間性と正しい倫理観を持った国際社会に貢献できる専門性の高い獣医師を養成すべく、教育や研究に取り組んできました。今回の評価結果は、それらの取り組みが高く評価された結果と捉えられます。また、本評価において指摘のあった検討課題については、今後、改善に努め、国際水準の獣医学教育を目指す予定です。



・ヒトレトロウイルス学共同研究センター開所に伴う除幕式を開催

4月3日、桜ヶ丘キャンパスにおいて「ヒトレトロウイルス学共同研究センター」開所に伴う鹿児島大学キャンパス銘板除幕式を開催しました。



「ヒトレトロウイルス学共同研究センター」は、鹿児島大学の「難治ウイルス病態制御研究センター」と熊本大学の「エイズ学研究センター」を統合・再編し、平成31年4月1日に両大学が合同で新たに設置したセンターです。研究部門の統合・再編により、人的・物的資源を戦略的に再配置し、両センターの共通目標である難治性ウイルス感染症の克服を目指します。

さらに、両センターの融合をモデルケースとして、地方の国立大学が培ってきた強みを失うことなく、これからの少子化・経済情勢に対応できる、地方国立大学の新たな連携の在り方を構築することが期待されています。

・農林水産学研究科の設置に伴う銘板除幕式を開催

4月3日、農・獣医共通棟において「大学院農林水産学研究科」設置に伴う銘板除幕式を挙行之、佐野 輝学長、橋本 文雄農林水産学研究科長、佐久間 美明副研究科長が銘板除幕を行いました。

農林水産学研究科は、農林資源科学、食品創成科学、環境フィールド科学、水産資源科学の4専攻からなる大学院研究科で、本学の農学研究科（修士課程）及び水産学研究科（修士課程）を統合して設置したものです。

ICT化等による先進的スマート農畜林水産業を創出する人材や食の安全・品質保証・グローバル化に適応可能な人材の養成等、農学分野と水産学分野双方の高度な知識を有する人材育成に対応するため、既存の農学研究科の3専攻と水産学研究科の5分野を統合しました。

本研究科は、人の健全な生活の基盤である農林水産業、食、環境、生命科学などの分野に関する高度な専門教育を行い、農学及び水産学が取り扱う分野における高度な研究・開発能力を備え、地域に貢献できる人材、さらには世界で活躍できる人材の養成を目指しています。



・「大学と地域」で佐野 輝学長が講義を行いました

4月9日、初年次学生向けの全学必修科目（すべての学部生にとって卒業要件）「大学と地域」で、4月に鹿児島大学長に就任した佐野 輝学長が第一回の講師として登壇し、講義を行いました。



本科目「大学と地域」は、1年生全員に受講が義務づけられた全学必修科目です。(1) 論理的思考力等の醸成、(2) 地域貢献意欲を持った人材の養成、(3) 地域志向マインドの醸成に必要な地域特性や優位性、発展可能性の理解を促進、(4) 上記(1)～(3)を通して地元への就職意欲を増進すること、を目的としています。

今回の講義は、「大学と地域」が展開する7テーマのうち「教育」「医療」を選択している学生の講義室で行われ、その他の講義室には、インターネットを利用した授業収録・配信システムによって中継され、約1,100名の学生が同時に受講しました。

講義の冒頭、佐野学長は、鹿児島の多様な自然や産業、工芸等の技術を紹介。その後、かつて薩摩藩が輩出した島津 斉彬、西郷 隆盛、大久保 利通など、明治維新と日本の近代化に重要な役割を果たした人材について触れ、世界に誇れる特色を持つ鹿児島の地でこれから学ぶ新入生を激励しました。

また、本学の「UCL 稲盛留学生制度」等の海外留学支援制度の説明を行い、「本学のさまざまな留学支援制度を大いに活用し、わが国をリードするような人物となってほしい」と語りました。

講義後、学生から提出された受講カードには、「他県から入学しているので、学生生活を通して鹿児島についてもっと知りたいと思った。」「鹿児島には、火山、生物、南西諸島などたくさんの魅力があることを改めて実感できた。これから大学で、この講義を通して地域の特色をよく理解し、将来、地域に貢献できるような人材になっていきたいと思う。」等のコメントが見られ、今後の学習意欲を向上させる機会となったことが窺えました。

今後も「大学と地域」では、様々なフィールドで活躍する方を講師として招聘する予定です。

・ドローンで漂着ごみをモニタリング。工学部の加古真一郎助教が原田環境大臣と意見交換を行いました

工学部の加古 真一郎助教（海洋土木工学専攻）は、九州大学の磯辺 篤彦教授らのグループで、海洋プラスチックごみに関する研究を行っています。この研究は環境省の競争的研究資金「環境研究総合推進費」を利用したものです。



4月17日、「海洋プラスチック官民イノベーション協力体制」構築に向けた意見交換として、加古助教は、磯辺教授、香川県環境森林部長、環境管理課長らとともに原田 義昭環境大臣を訪問し、海洋プラスチックごみの回収とモニタリングの取り組みについて意見交換を行いました。加古助教は、ドローンを活用した空撮による海洋プラスチックごみのモニタリング技術を開発しており、鹿児島県の吹上浜や上甕島での実験の様子を原田大臣に紹介しました。

・「麓」の魅力を発信!学生が麓街歩きマップ第2弾を制作しました

工学部の鯉坂 徹教授（建築学専攻）の研究室に所属する学生らが、このほど「麓（ふもと）街歩きマップ」第2弾を制作しました。

マップでは、出水麓、知覧麓、入来麓など国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている麓の他、加世田麓、喜入麓など14ヶ所を取り上げています。学生らが執筆した文章や、撮影した写真・キャプションを、鯉坂教授と同研究室の増留 麻紀子助教が監修しました。麓の特徴や歴史を分かりやすく解説した、見応えのある内容となっています。



「麓」は近世の薩摩藩が統治した伝統的な集落のことです。鹿児島県と宮崎県に約120ヶ所所在しており（そのうち鹿児島県は100ヶ所）、熊本以北にはない特徴的な景観を生み出しています。鯉坂研究室では、これらの麓をより多くの人に知ってもらい、後世に残していくべく、2013年（平成25年）、「鹿児島県建設技術センター地域づくり助成事業」の助成を受けたことを契機にマップ制作に着手。学生らは各地の麓に出向き、建物の調査や住民への聞き取りを行ってきました。2017年には街歩きマップ第1弾を制作。そしてこのほど、写真の差し替えや、新たな研究内容等を追加した第2弾を「米盛誠心育英会研究助成事業」の助成により完成させました。

工学部建築学科では、長年、教員や学生らが麓の調査を行ってきており、この街歩きマップもそれらの研究を受け継いでできたものです。

なお、これらの麓は、5月20日、鹿児島県としては初となる日本遺産（さつもの武士が生きた町～武家屋敷群「麓」を歩く～）に認定されました。



・堀之内聖さん(教育学研究科2年)の作品が「第66回県美展」で県美展賞に選ばれました

鹿児島県美術協会などが主催する「第66回県美展」の審査結果が5月15日公表され、教育学研究科2年の堀之内 聖(さとし)さんの作品「しじまの向こうへ」が、公募の部の最高賞である県美展賞に選ばれました。

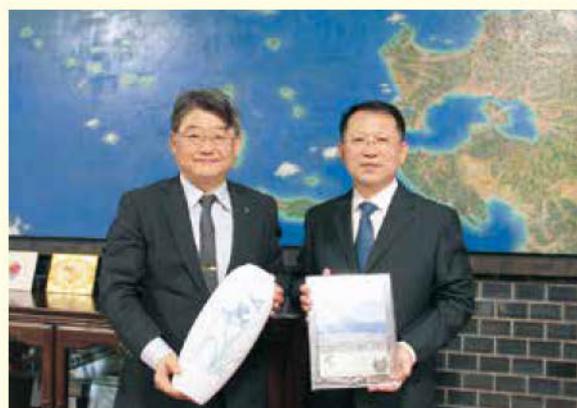
公募の部には、洋画・日本画・彫刻・工芸・デザイン・写真の6部門に計599点の出品があり、419点が入選しています。(堀之内聖さんの詳しい記事はP19)



・中南大学副学長一行が佐野学長を表敬訪問

5月24日、中国・中南大学の陶立堅副学長一行が佐野学長を表敬訪問しました。

中南大学とは、1993年に本学医学部と中南大学の前身である湖南医科大学との間で部局間交流協定を締結した後、1998年には大学間学術交流協定に発展させ、以降、医学部のみならず農学部や工学部等、全学的に研究交流及び学生交流が活発に行われております。今回は、今後より一層の学術交流活動を促進するとともに、両大学の更なる信頼関係の醸成に資することを目的に佐野学長を表敬訪問したものです。



懇談には、馬場 昌範理事・副学長(研究・国際担当)、畠田谷グローバルセンター長、嶽崎 俊郎医歯学総合研究科教授、桑木 共之医歯学総合研究科教授も同席し、佐野学長からの歓迎挨拶の後、これまでの交流実績や来訪履歴、研究分野など、今後の活発な学術交流活動の継続について、和やかに歓談が行われました。

表敬訪問の後には、会場を移し、王鋼理工学研究科教授をメンバーに加え、今後の交流に関する意見交換会が行われました。意見交換会では、奨学金や学生の留学期間等、主に学生交流に関する事項について意見を交わし、今後の交流の更なる発展への契機となりました。

・国際島嶼教育研究センター奄美分室が、移転見学会・講演会を開催しました

6月1日、国際島嶼教育研究センター奄美分室の移転見学会および移転記念式・講演会が奄美市で開催されました。これは、2019年3月末に、同センター奄美分室が、奄美市名瀬柳町から港町の袖会館6階に移転したことを記念し、開催したものです。

本学からは、佐野 輝学長、岩井 久理事、河合 湊センター長らが出席し、朝山 毅奄美市長らとともに、新装なった奄美分室を見学しました。その後、奄美観光ホテルで記念式典と記念講演会が行われ、約70名の参加者が、講演に耳を傾けていました。



CONTENTS

| | |
|---|----|
| 特集 | 2 |
| 鹿児島大学第13代学長 佐野 輝 学長 就任 「南九州から世界に羽ばたくグローバル教育 研究拠点・鹿児島大学」を目指して | |
| 潜入ルポ ～学びの部屋～ | 6 |
| 「古代東アジアの王陵」 (共通教育科目) 総合研究博物館 教授 橋本 達也 先生 | |
| 先輩からのメッセージ | 8 |
| クリエイティブディレクター/UXディレクター 伊原 亮 さん | |
| Scholar Interview ～研究室から～ | 10 |
| 鹿児島大学 大学院連合農学研究科 博士(水産学) 寺田 竜太 先生 | |
| 知のタネ | 12 |
| 生活者の「生きる力」の 育成と家庭科教育 教育学部 准教授 黒光 貴峰 先生 | |
| 鹿大トピックス | 14 |
| 南九州市と包括連携協定を締結 ほか | |
| 進め! 鹿大生 | 19 |
| 第66回鹿児島県美展において県美展賞受賞 教育学研究科2年 堀之内 聖 さん | |
| 鹿大プラス | 20 |
| 本格焼酎 薩摩熱徒 | |

・令和元年度名誉教授称号記授与式を
挙行了しました

6月27日、事務局特別会議室
において、令和元年度名誉教授
称号記授与式を挙行了しました。

名誉教授の称号は、本学の教
授として15年以上在籍し、教育
上、学術上または本学の運営上
特に功績があった等の方に授与
するものです。今年度は15名の



先生方に名誉教授の称号を授与することとなり、式に出席された9
名の先生方に、佐野 輝学長が称号記を授与しました。

佐野学長は挨拶の中で「先生方のご功績を称え、名誉教授の称号
記を授与できますことを心からお慶び申し上げます。」と祝辞を述
べるとともに、「先生方におかれましては、法人化前後も含め、大
学改革が求められている激動の時期にも、本学をしっかり支えてい
ただきました。これからもご助言やご支援をいただき、大学OBと
して、また大学の応援団として、本学のためにお力をいただければ
と願います」と長きにわたり本学に貢献された先生方に謝意を表し
ました。

授与式後は、学長、理事及び各学部長・研究科長らとの懇談会が
行われました。



鹿大「進取の精神」支援基金へのご寄附のお願い

鹿児島大学は、地域活性化の中核的拠点として、学生のグローバル教育の推進や
地域に貢献する人材の育成など教育研究支援の強化に取り組むため、鹿大「進取の精
神」支援基金を創設し、寄附のご協力をお願いしております。

つきましては、本基金の趣旨にご賛同いただき、皆様のご協力を賜りますよう、よろ
しくお願い申し上げます。

なお、本学への寄附につきましては、所得税法、法人税法上の優遇措置の対象とな
ります。

お問い合わせ先 鹿児島大学総務課基金・渉外係
TEL:099-285-3101 FAX:099-285-7034
E-mail: s-kikin@kuas.kagoshima-u.ac.jp
基金ホームページ: <https://www.kagoshima-u.ac.jp/kifukin/>



鹿児島大学 古本募金
読み終えた本・DVD等
ご支援ください

詳細・お問い合わせ
鹿児島大学 古本募金
☎ 0120-29-7000 (電話受付) 9～18時・5653
運営協賛: 古本募金キッズ(株) (福岡野村株式会社)

進め! 鹿大生

第66回鹿児島県美展において県美展賞受賞

堀之内 聖 さん(教育学研究科2年)

Satoshi Horinouchi

受賞作「しじまの向こうへ」は、森にたたくむ人物や花、動物を繊細な筆致で描き、審査員の高い評価を得ました。「オリピックなど明るいムードがある一方、事故など暗い現実もある。人の生死や生命力の向かう方向を表現しました」

精緻な筆づかひの写実的な作風ですが、「きれいに描くのではなく、現実には存在しない景色を創りだして自分の世界観を表現する」ことを意識しています。「感覚的な人間ではなく、経験と鍛錬によって積み上げていくタイプ」と自己を分析。画題の着想を得るため、ひとり野山を歩き回ることもあれば、いろいろな街や人に会いに出かけることも。「見た景色に影響を受けやすい性質」と笑いながらも、創作のヒントとなる情報の収集に余念がありません。

美術の道をあきらめ、他学部への進学を考えた時期もありましたが、子どもの頃から好きだった道を選びました。「周囲から反対された時期もありましたが、努力し続けることで証明できれば」。次に描き始めた作品では、具象に抽象を取り入れる新しい作風への挑戦に取り組んでいます。



座右の銘

「正しい答えが
人生のすべてじゃ
ないでしょう?」

スヌーピーで有名なチャールズ・M・シュルツの漫画「ピーナッツ」に登場するチャーリー・ブラウンのセリフの一節です。上手くいかずに悩んでいる時は、つい正解を探そうと必死になってしまいます。そんな時はこの言葉を思い浮かべます。作品制作は失敗の繰り返しですが、この過程があってこそ今に繋がるのだと思います。人生もまた、制作の段階と重なるものがあるのではないのでしょうか。



「しじまの向こうへ」2019



「明日への座標」2018



鹿大プラスでは、鹿児島大学インフォメーションセンターで販売している鹿児島大学の研究・教育活動の成果として完成した商品を紹介しします。



本格焼酎 薩摩熱徒

本格焼酎 薩摩熱徒 容量:720ml 度数:25度 価格:2,000円(8%税込) ※消費税増税に伴う価格改定の予定あり

明治維新150年の2018年、鹿児島市と山口市が明治維新150年を記念した地方創生プロジェクトを展開し、その一環として、鹿児島大学と山口大学の、両農学部が連携協力し、地元の酒を造る「薩長同盟酒プロジェクト」を企画しました。

今回紹介する鹿児島大学ブランド焼酎「薩摩熱徒」は、

両大学の学生が協力し、鹿児島で栽培した酒米(山田錦)とサツマイモ(コガネセンガン)を使って開発・製造したものです。本学の誇る篤姫酵母と黄麹で醸された、柔らかな甘みと華やかな香りが特徴です。

なお、本焼酎の命名とラベルデザインは鹿児島大学の学生によるものです。



お求め・お問い合わせ先 **インフォメーションセンター(鹿児島大学正門横)**

☎099-285-3864 開館時間:月曜日～金曜日(休日・祝祭日を除く) 9:30～16:30(昼休み13:00～14:00)

今号の表紙「水産学部附属練習船かごしま丸」

鹿児島市谷山港から出航した水産学部附属練習船「かごしま丸(国際総トン数1,284トン)」の雄姿です。短期航海や日帰り航海を行う「南星丸」に対し「かごしま丸」は日本沿岸から近海、北西太平洋などの遠洋区域を実習海域として1週間から50日程度の中長期航海を行います。熱帯・亜熱帯水域における洋上教育のための共同利用拠点として、本学水産学部・大学院の利用はもとより、他学部・大学院および他大学への供用が行われています。航海術、高度水産技術の習得に加え、洋上という環境を長期体験することによりシーマンシップを養う場となっています。

